

古事記傳

四十二

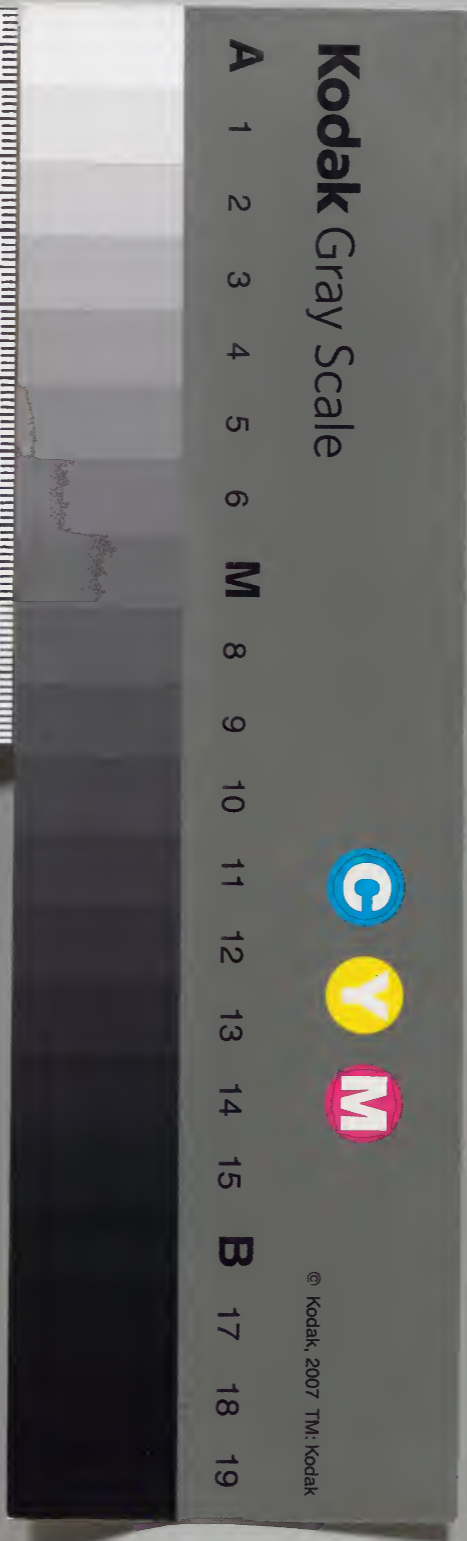
和書
一〇五二一號

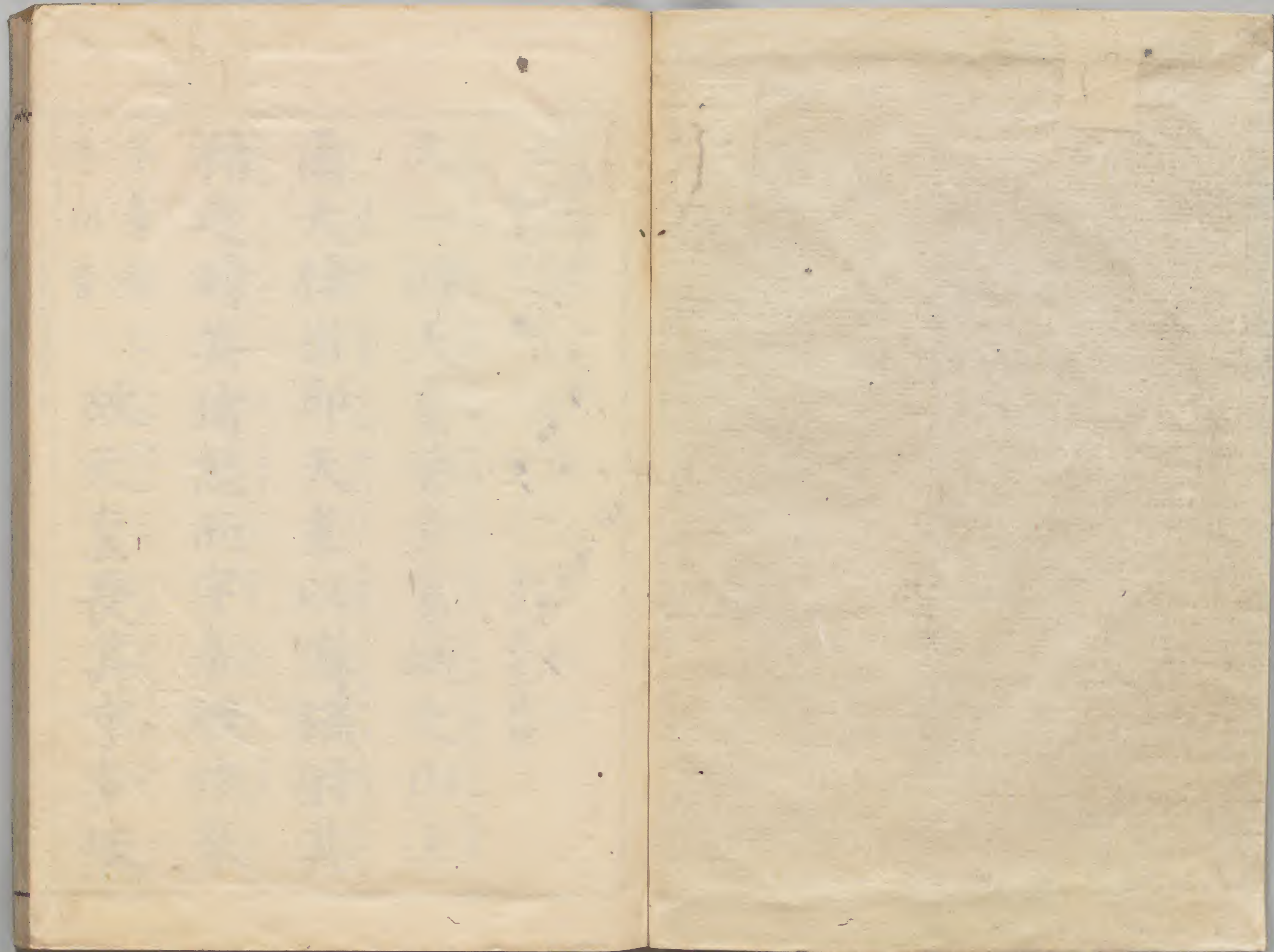
和書門
一〇五二一號
七九一號
六八架
四八冊

內閣文庫
和書
一〇五二一號
四八冊
三七函
一八架

內閣文庫	
番號	和 10521
冊數	48 (45)
函號	137 1

內一三六八二號





古事記傳四十二之卷

丙 一 二 六 八 二 號

朝倉宮下卷

本居宣長謹撰

又マダアルトキ一時スメラミコト天皇登幸葛城之山上カツラキノヤマノウヘニノボリイデマシキ

爾コハニオホ大猪出即天皇以鳴鏑射其イテタリキスナチスメラミコトナリカゾラヲモチテソノキヲイタ

猪マヘルトキニ之時ソノキ其猪怒而宇多岐依來イカリテウタキヨリク

宇多岐カレ三スメラミコト故天皇畏其宇多岐ソノウタキヲカシコミテ

字以音

○古事記傳四十二

一

登坐榛上爾歌曰夜須美斯志
 和賀意富岐美能阿蘇婆志斯
 志斯能夜美斯志能宇多岐加
 斯古美和賀爾空能煩理斯阿
 理袁能波理能紀能延陀

ハリノキノウヘニノボリニシキカレニウタヨシシタケクヤスミシ

葛城は上小出○山上は夜麻のみに訓傳を加

○登幸書紀には獵マツル此記を然に見えざる也
 毛御哥小夜美斯志也あまは御獵を依傳し○大猪を

意富韋也訓傳仁徳天皇の御哥小意富韋古也何也
 御獵小は斯志也云ぞ常な○鳴鏑上卷小出傳十の

宇多岐也怒を依声ふ依傳し岐也書紀小枳字を書き
 清も濁も書也此夏首卷小委云至出雲風土記

秋鹿郡大野郷の処小和加布都奴志命の猪を狩給
 あり事見え同郡小大野津神社宇多貴神社也並び

非亦か速かこ也引れ俗言小宇那流也云不通
 聞ゆ○榛は諸本小榛也作依を誤り今此は波理

能紀^キや訓^シ傳^シし。訓^ハ波理^ヤの^ノみ。今^ヨ俗^ハ波^ハ年^ム能^キ木^ヤ云
物^ナり。万^ノ葉^ノの^ノ哥^ハ。榛^ヤの^ノ依^モ是^ナり。皆^ハ波^ハ理^ヤの^ノ訓^シ傳^シ
萩^ヤの^ノ心得^シ。契^ハ冲^ハ云^ハ頭^ハ昭^ハ萩^ヤの^ノ榛^ヤを^ハ一^ツ云^ハま^ハ云^ハ万^ノ葉^ノ
の^ノは^ハか^ハと^ハ。芽^ヤの^ノも^ハ芽^ヤ子^ヤを^ハ書^キ。木^ノの^ノは^ハぎ^ハ。榛^ノ
字^ヲと^ハ書^キ。榛^ノを^ハは^ハる^ハあり。は^ハぎ^ハ云^ハや^ハけ^ハり。木^ヤ云^ハ傳^シ
を^ハま^ハと^ハを^ハ畧^セ世^ハ依^ナり。俗^ハを^ハは^ハんの^ノ木^ヤ云^ハ日本^ノ紀^ノ
の^ノ。蓆^ハ摺^ハ衣^ヲを^ハや^ハり。万^ノ葉^ノの^ノ衣^ヲと^ハ染^ル。や^ハよ^ハ未^ハ依^コや^ハ多^シ。
今^モ田^ノ舎^ヲを^ハや^ハり。榛^ヲを^ハ植^メ置^テ。漆^具を^ハ依^ナり。萩^ハ
萩^ハが^ハ花^ハの^ノ依^ナり。云^ハこ^ハや^ハり。故^ハの^ノ頭^ハ昭^ハ誤^ラま^ハり。榛^ノ
を^ハ全^ク芽^ハ子^ハの^ノ非^ハ交^ハよ^ク万^ノ葉^ヲを^ハ見^テ辨^ハふ^ハ傳^シし。や^ハ云^ハる

か^ハ如^シ。但^シ云^ハは^ハま^ハぎ^ハら^ハは^ハき^ハ云^ハり。草^ノの^ノは^ハぎ^ハ。波^ハ理^ノの^ノは^ハぎ^ハ。
こ^ハや^ハり。是^ハ混^ラら^ハは^ハし。其^ハ故^ハを^ハ萩^ハ子^ノ草^ノを^ハ依^ナり。木^ノを^ハ依^ナり。
二^ノ種^ノの^ノ頭^ハ昭^ハの^ノ榛^ヤを^ハ依^ナり。木^ノを^ハ依^ナり。萩^ハの^ノこ^ハや^ハり。
榛^ヲを^ハ其^ハの^ノ當^ハり。依^ハは^ハ誤^ラれ^ハる。契^ハ冲^ハの^ノこ^ハや^ハり。波^ハ岐^ハの^ノ如^シ。
訓^ハて^ハ木^ノの^ノは^ハぎ^ハ云^ハは^ハか^ハの^ノ木^ノの^ノ依^ナり。萩^ハの^ノこ^ハや^ハり。波^ハ岐^ハの^ノ如^シ。
お^ハも^ハ聞^クて^ハる。非^ハ交^ハ。但^シ波^ハ理^ヲを^ハも^ハ波^ハ岐^ハを^ハ書^キ。波^ハ岐^ハの^ノ波^ハ理^ハの^ノ木^ノ。
お^ハ有^リ。か^ハ知^ラら^ハ波^ハ理^ノの^ノ畧^ハを^ハ依^ナり。波^ハ岐^ハを^ハ書^キ。波^ハ岐^ハの^ノ波^ハ理^ハの^ノ木^ノ。
云^ハる。お^ハ榛^ヤを^ハ書^キ。波^ハ理^ノの^ノ畧^ハを^ハ依^ナり。波^ハ岐^ハを^ハ書^キ。波^ハ岐^ハの^ノ波^ハ理^ハの^ノ木^ノ。
の^ノこ^ハや^ハり。非^ハ交^ハ。又^ハ万^ノ葉^ノを^ハ依^ナり。波^ハ岐^ハを^ハ書^キ。波^ハ岐^ハの^ノ波^ハ理^ハの^ノ木^ノ。
非^ハ交^ハ。九^ハて^ハ万^ノ葉^ノの^ノ依^ナり。波^ハ岐^ハを^ハ書^キ。波^ハ岐^ハの^ノ波^ハ理^ハの^ノ木^ノ。
花^ヲを^ハよ^ク分^メる。榛^ノの^ノ衣^ヲを^ハ依^ナり。波^ハ岐^ハを^ハ書^キ。波^ハ岐^ハの^ノ波^ハ理^ハの^ノ木^ノ。
と^ハ師^ノの^ノ万^ノ葉^ノを^ハ別^ニ記^ス。榛^ノの^ノ花^ヲを^ハ依^ナり。波^ハ岐^ハを^ハ書^キ。波^ハ岐^ハの^ノ波^ハ理^ハの^ノ木^ノ。
お^ハ保^ハ波^ハ勢^ハの^ノ誤^ラり。一^ツ巻^ヲ引^キ馬^ノ野^ノの^ノ仁^ハ保^ハ布^ノの^ノ榛^ノ原^ノ入^リ。衣^ヲを^ハ依^ナり。
交^ハる。衣^ヲを^ハ摺^ル。色^ハを^ハ引^キ馬^ノ野^ノの^ノ仁^ハ保^ハ布^ノの^ノ榛^ノ原^ノ入^リ。衣^ヲを^ハ依^ナり。
見^テ良^ク目^ヲの^ノ依^ナり。榛^ノの^ノ見^テ心^ヲ云^ハは^ハ街^ノの^ノ来^ハ左^ノ野^ノ之^ノ社^ノ。

○古事記傳四十二

○三

榛原の九て地を見む云は形り此上を家哥小猪名
野者見せたる角松原何時か見せむ也巧類
を萩の花の波里良和我加爾都伎与良之母与保
呂乃蘇此乃波里良和我加爾都伎与良之母与保
云一巻小狹野榛能衣著成此二首なや衣不著也云
依趣同を以て榛を波理や訓修さるやを知修し
はて又榛字をサ小以て慕やも書修る就てな萩お
らむかや疑ふ人もある修けむや母慕を榛也字の通
多を以て通はし ○夜須美斯志和賀意富岐美能二句
書るのみなり ○阿蘇婆志斯は射賜了依を云る九そ阿蘇
上ふ出 ○阿蘇婆志斯は射賜了依を云る九そ阿蘇
夫を了了主や樂次依字云也其事は傳世の廿又廣
く如此依事をも云る上巻小鳥遊也巧依も鳥を狩依
こ也なり 傳十四の字は原物語小も弓射依事もある
は依也巧も其外甕栗宮段哥に阿蘇毘久流志毘賀波

多傳尔書紀天智卷哥小于知波志能都梅能阿素弭尔
万葉三十三小世間之遊道尔五十七小鳥梅能波奈家
布能阿素毘尔阿比美都流可母鳥梅能波奈多乎利加
射志互阿蘇倍母十三八丁小云之登之而國見所遊
拾遺集下雜詞書小御碁巧をばけ依を也母巧也俗皆今
云遊帝也大方同意なり源氏物語橋姫卷小琴をくは
し碁うち偏突を尊みは加なき御遊びわは小於けても
云く又阿蘇夫を尊みて阿蘇婆須也云依も今世の言
水同じさて其は被成り於りて今世小は九て為也云こ
也を尊みては被成り ○志斯能也猪之形り ○夜美斯志
能は病猪之小て俗小いはゆ依手負猪なり書紀了は
此句を了後小脱せ依を依修し ○宇多岐加斯古美ハ

ふよ事アヤコ此聞えられ臨刑而作るさまふを非交
又書紀よ々此哥の次ハ皇右云々の事アヤ其中心樂
哉云々朕獵得善言而帰中天皇此詔アヤあるは
此のハ漢書きてこそ聞ゆ皇國の上古此人の云
身言二所々々を詔はむ九てか言云を
か然ふとやを詔はむ九てか言云を
いみどさゆゆユまははから國のあふひ
あていけゆは俳諧さまのさやをりかし

又一時天皇登幸葛城山之時

百官人等悉給著紅紐之青摺

衣服彼時有其自所向之山尾

ヤマノウニノボルヒトアリ。ステニスメラミコトノニユキノツラニヒトシクソ

登山上人既等天皇之鹵簿亦

其装束之状及人衆相似不傾

爾天皇望令問曰於茲倭國除

吾亦無王今誰人如此而行即

答曰之状亦如天皇之命於是

スメラミコトイタクイカラシテヤサシタマヒツカサバノヒトバモ、コトクニ
 天皇大忿而矢刺百官人等悉
ヤサシケレバ。カノヒトバモ、ミナヤサセリ。カレスメラ
 矢刺爾其人等亦皆矢刺故天
ミコトマタトハシメタマハクシカラバソノナラノラサネ。オノモクナヲノリテ
 皇亦問曰然告其名爾各告名
ヤハナタムトノリタマヒキ。コ、ニコタママツクアレマツトハエタレバ
 而彈矢於是答曰吾先見問故
アレマツナノリセムアハマガコトモヒト
 吾先為名告吾者雖惡事而一

言雖善事而一言言離之神葛
コトヨゴトモヒトコトコトサカノカミカツラ
 城之一言主之大神者也天皇
キノヒトコトヌシノオホカミナリトマヲシタマヒキ。コ、ニ
 於。是。惶。畏。而。白。恐。我。大。神。有。宇
スメラミコトカシコミテマラシタマハカシコレアガオホカミウツシ
 都志意美者
オミマサムトハ
 自宇下五
一サトラサリキトマラシ
 不覺白
字以音
 而大御刀及弓矢始而脫百官
テオホミタチマタユミヤヲハジメテツカサバノ

ヒトバモノケセルキヌヲヌガシメテヲロカミテタテツリキ。カレソノ
 人等所服之衣服以拜獻爾其
 ヒトコトヌシノオホカミ。テウチテソノサ、ゲモノヲウケタマヒキカレ
 一言主大神手打受其捧物故
 スメラミコトノ。カハリマストキ。ソノオホカミ。ヤマラクダリキミシテ
 天皇之還幸時其大神滿山末。
 ハツセノヤマノクチニオクリマツリキ。カレコノヒトコトヌシ
 於長谷山口送奉故是一言主
 ノオホカミハ。ソノトキニゾアラハレマセル。
 之大神者彼時所顯也

ツカセノヒトバモ
 百官人等かく聯まゝ依四字孝徳紀又諸の祝詞宣命
 をやふ多く見ゆ古の定まりより書さるるありけむ百
 官は明宮段小出傳卅三の著紅紐之青摺衣は高津
 宮段小出傳卅六の給多麻波理互々訓多麻比互々百官
 人の受て服ある方より云処をれば形多麻比互々
 皇此與了賜多方。○服を伎多理や訓下文又ハ伎
 服二字を書しれやも。此は然訓てハ伎流や云言をく
 了語、宮段見えらるも。必別一離て讀彼
 高津宮段見合高津さて此又かく装束の事を殊
 服高津云々下其装束之状云々脱百官人等所
 服之衣服云々山尾九て山又

寺本小と束装と作_レ。上巻中も書紀神功卷一云云。云の文も然あはば古小然も書りしあり。○
不傾を、決く寫誤あり。了し。師と傾を揖の意なり。とて
上の相似ゆりの考もき穩あり。又延其字詳あり。又
佳と駿の誤あり。むと云まきど心得ん。其字詳あり。又
強ていば、頌字の誤也。して和加礼受と訓了きふや。
字義を當らざれども分也。とも注し。他不思得。依
まハ無別の意。又借るまきおも非也。他不思得。依
こやふまれど姑然訓考ふやよく考ふ了し。○望を美
夜良志_互。見遣と云も。万葉十_{十三}。小吾者見將遣君之
當波_{勢田}社寛平縁起倭建命御哥小。奈留美良乎美也。
礼波止保志。○除吾万葉五_九。小安礼乎於伎_互人者
安良自等。○無王を伎美波那伎_衣と訓了し。○誰人云

云。上巻小誰来我國忍く如此物言とある也。似依文
なり。○亦如天皇之命とは。彼方より母又同じさふ。小
答免奉まうし。なまがし。○矢刺を上小見也。傳十の
其人等も。句の山尾より登行ある人等なり。○然とは
上のの答を承て詔ふあり。○告其名も。曾能那表能
良佐泥と訓了し。其と云も上の卷の万葉_七。小名告
沙根。○各も。其方も此方もなり。○彈を波那多牟と訓
了し。中巻水垣宮段中も此字逆書あり。○見問を登波
延多礼婆と訓了し。とは名ハとは。○吾先為の先字無
き本どもあり。今を真福寺本延佳本小依ま。○雖惡

事々麻賀許登母と訓了し御門祭祝詞小惡事古語麻
我許登とあり惡字小を洗むるなり次小引土左風
名惡も凶の土記小凶事と書るぞ廣くても當き
内小ありさて母と云辭小雖字の意をもり此字
を以て書る亦さども不へドモと訓くも古語なりさる
小あり又師をかコトモト訓きさるれども也
君之隨意とあり訓ありさる此と同一さるなれど哥の
さるを思ふ小是ハ知ツトモトモと訓ざると叶の
ざれを此とは異なる事の下なる而字を雖字小よれ
る漢文の格を以善事を余基登と訓了し雖を上と
て書るのみなり同格なり
万葉廿六丁小新年之始乃波都波流能家布敷流由伎
能伊夜之家餘其騰これ正月元日小雪の降まるを吉
事と云るなり九余基登と云るに言と事との異あり
事詞賀詞ふやハ言なり事必非也さ

こと古書小も其字ハ多く言と事と相通はて書る
其文小あり解了し此善事と善字小を洗む
事と書るぞ廣くても當き此凶事吉事も
一言と詔了る意と次小云了或書小雄畧帝獵葛
誰哉神答白也故世考曰一言主神也或書小八峯
者問神名神答曰主由是以主之一言考曰一言主神不
ど云るハ一言主と申ハ御名小就て造る依言離
説をこを聞也此記又風土記の趣小違了り
を許登佐加と訓了し土左國風土記小言放と書き書
紀神代卷小泉津事解之男孝徳卷小為事瑕之婢事瑕
此云居騰作柯こと小依右の神代卷を離る意なり
解字の意も通了さて孝徳卷なるを瑕字ハ心得ぬ
ども許登佐加と云る由右の神名の意と同一附也
を遠ざうれ意を以て書れやありむさて

此、御名を負坐る由ハ、凶事凶も吉事吉少くも此神の
一言小て解放サカ離カる意意なり。然まバ言を借字小て
事離サカなり。事ハ凶事凶吉事吉の事なり。さして凶事を離賜サカと
むことといひ、思ふ人ありむ。其を御怒怒ありむ。小
因、てハ人の吉事を離給ふこともふどか無うむ。多
と御一言小て凶事も吉事も忽小解離サカら
むといと、尊尊可可長長大神大小小坐坐まら。○葛城之。真
寺本小を。○一言主之大神御名義上、文少て聞えり。
之、字小を。○此神を大物主神なりとも。事代主神なりとも。○恐我大
も申申説説あまど。其を詳詳あり。○神と云こと
神中卷訶志比宮段少と。建内宿祢白恐我大神云。三傳
十の四。○宇都志意美と現大身あり。と師の云き。依
十六葉。○如し。大と御と云。書紀小。此時此大神の御答小。現人之
如し。大と御と云。書紀小。此時此大神の御答小。現人之

神と申給する也同じことあり。現人神とハ顯顯まて人
な。大の神を形ハ隱坐隠顯顯小を見え賜賜ハさるを。是
を御身の現現小く見え賜賜するを申給するなり。書紀神
代卷小。顯見蒼生此云宇都志枳阿烏比等久佐久不傳
六二十四葉。考ふずし。大と尊み申賜するなり。○有
者ハ麻佐牟登波と訓訓ずし。阿流を尊みて。○注。宇の下
小都字ある本を誤なり。今を真福寺本小依きり。○所
服之師の祈勢流祈と訓訓ま。依宜し。中卷倭建命の御哥
小那賀那祈賀勢流勢とあり。傳傳廿八。○衣服衣をかかの著著紅紅紐紐青
指指衣衣どもなり。○獻獻を百官人百なり。獻獻小を非非バ。天皇

の献賜ふ由なり。然るを献て賜ふとは訓。古語
ふを連ねて云ふことあり。必賜ふと云ふ古語なり。○手打ハ物を得
賜ふを歡喜賜ふ態あり。書紀顯宗卷室壽御詞ハ手掌
膠亮拍上賜吾常世等與と云を即此拍上ハ手を拍
段傳廿七の十五兼持統卷小皇后即天皇位公卿百寮
小委云り考ふ。し。持統卷小皇后即天皇位公卿百寮
羅列匝拜而拍手馬續紀廿八ハ云く是日緇侶進退無
猶法門之趣拍手歡喜一同俗人三代實錄卅六ハ大極
殿成右大臣設宴於朝堂院含章堂賀落也云く飛驒工
等二十許人任感悅起座拍手哥舞合座大為咲樂貞
觀儀式踐祚大嘗會儀ハハ日國栖奏古風五成悠紀國

奏國風四成次語部奏古詞次隼人司率隼人云く奏風
俗歌舞皇太子以下五位以上就庭中版跪拍手四度別度
八遍神語所謂ハ六位以下亦如是其小齋人不在拍限
閑手是也云く又春日祭儀ハ云く觴三行拍手一段訖ハ園并
韓神祭儀ハ云く屬趨入就版申云御飯賜了神祇官拍
手三段酒盃三行了拍手一段平野祭儀ハ鎮魂祭儀ハ
云く大膳進屬以下共起賜神祇官次大臣以下訖大膳
進就版申云御飯賜畢共拍手三度先後觴三行亦拍手
一度此事式ハ北山抄十一月辰日節會儀ハ次供白
黑御酒次給臣下稱名給之土衣日記哥ハおひ風の吹

ぬる時は行舟も帆手打てあそ喜か
悦びて手拍こ
やと船の帆手をやつるみな樂く
歡心よ拍か
ふ云かあつり
又物を受取ゆて拍あやつる
貞觀儀式園韓神祭
儀ふ護木綿を賜多処ふ
神祇官人又參議以上五位以
上諸司判官以下召使以上諸司史生以下歌女以上並
拍手受之
平野祭儀ふ護木綿を賜ふ処ふ云々轉
獻皇太子拍手稱唯受而着之云々
まゝ九月十一日奉
伊勢大神宮幣儀ふ勅忌部參來忌部稱唯升殿跪拍手
四段先執豐受宮幣授後執大神宮幣
如元自持復版
幣拍手
大神宮儀式帳六月祭儀ふ即大神宮司以御護
一段

木綿參入互正道同重跪向大神宮侍即命婦退出受取
奉親王尔即親王拍手互取木綿著護大神宮司復執太
玉串互參入互跪同侍即命婦亦出受取奉親王尔即親
王拍手互自執互捧參入云々
九月祭も同じ親王
は齋内親王なり
あま
らば自物を得て飲ふふ非次あま物を受取やて拍
なり又貞觀儀式大原野祭儀ふ次神馬四足走馬八足
牽列神殿前次神主就祝詞座兩段再拜大臣以下共拜
讀祝詞了兩段再拜拍手平野祭儀ふ云々皇太子以下
亦兩段再拜拍手四段江家次第公卿勅使儀ふ次使以
下奉拜四度了拍手次四拜又拍手なりは拜て拍なり

倭を韓國連廣足なるをの靈異記小一言主神の諱
賜多由書し倭ハいかぶぞや大か多此らみても備
造るる不也志 ○彼時所顯也此以上小宇都志意美
保きものをや
如く現御身の顯して見え賜りるを云を倭語し又中
志比宮殿小住吉大神の御事を此時其三柱大神之御
名者顯也此あゆ中同くと一言主大神申以御名の
始て顯坐倭にやかやと思ひ是ハ御名をある
ざれば然小ハあゆ又御社も此時小始り坐倭か
と思ハ倭れ然らじ宇都志意美坐む此は覺らざり
き此天皇の申賜りるを御名又御社をぞも
しりありさ万 ○書紀云四年春二月天皇射獵於葛
城山忽見長人來望丹谷面貌容儀相似天皇天皇知是
神猶故問曰何處公也長人對曰現人之神先稱王諱然

後應道天皇答曰朕是幼武尊也長人次稱曰僕是一事
主神也遂與盤于遊田馳逐一鹿相辭發箭並轡馳騁言
詞恭恪有若蓬仙於是日晚田罷神侍送天
皇至來目水是時百姓咸言有德天皇也

又天皇婚丸邇之佐都紀臣之
女袁杼比賣幸行于春日之時
媛女逢道即見幸行而逃隱岡

邊キ故カレ作ミウタヨミシタヘル御歌ソノ其御歌ミウタ曰ヲ袁登賣トメ

能ノ伊イ加カ久ク流ル袁ヲ加カ袁ヲ加カ那ナ須ス岐キ

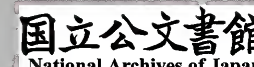
母モ伊イ本ホ知チ母モ賀ガ母モ須ス岐キ婆バ奴ヌ流ル

母モ能ノ故カレ號ソノ其岡ヲカヲ謂カナス金キヲ鉏カト岡ゾ也ナツケル

丸迹は姓なり。上小出傳廿二の四十六葉。佐都紀臣を名なり。名義五月か臣に戸なり。○袁村比賣名義未考得交を師

小戸の濁ふは地名を以て。云々。假字の例。此此賣此事下小見ゆ。書紀小春日大娘皇女を主奉。若くは父名女名共。小傳の異なる。同人あり。此袁村比賣小見え。小傳の異なる。同人あり。をかの童女君も本。○春日上小出傳廿一の丸迹臣の采女なり。やあり。○春日小幸行也。本居以丸迹を係と。此地の事傳廿三の春日小幸行也。云以古春日以廣き名小て丸迹も春日の内なり。ふ

里故下小春日之袁村比賣也。○媛女逢道は袁登賣能道尔逢流也。訓法。此媛女以誰也。非也。○岡邊ハ袁加備也。訓法。万葉五十七小乎加肥尔波字具比須奈久母十七十八小乎加備可良秋風吹



を非ばして母能やけ即上よ云依金鉏又鳥を指て云
小とつらむら書紀應神卷大御哥小吉備那流伊慕塙
阿比湊菟流莫能ふれも同格か此外母能表やえよ母
能ののみ云依例を猶若櫻宮段大御哥小多都碁母
母知互許麻志母能やつ依処小出せり傳北八の波奴
云言は万葉二二十小奥津加伊痛勿波祢曾边津加
伊痛勿波祢曾やあり一首の意以此媛女をよと見
むや所思おもほで依尔岡の彼方子隠きて見えざるまくと
をくおもほし所念着て金鉏を多く五百箇を得ふか此岡
を土と鉏き起し撥やまて崩してむ物と然せば隠を

多依媛女の形貌の見ゆ依まゆふ里○金鉏岡と金字
福寺本延佳本小依まり此岡金鉏小由縁以無けれ
やも今此大御哥小加那須岐母云く叱賦賜了る岡や
云意を以てか之は名けしる形なり此地長谷より
春日了傳の間小在依し其処詳なり書紀崇神卷小
和珥武録坂や云見えしと云が同まやの由と依れや
同地を依法く小おがえ契沖が金字と全や作依本
小依て夕ケスキ訓て崇神紀を引て若今の全鉏小
や鉏云る全を夕ケケ訓依き由あり又大和志小
全鉏丘在添上郡櫛本村や云て崇神紀を引又此の御
哥を引て那加須岐母やせり書紀の
武字も夕カやを訓法くを所と假字
以さるなりその字強事を依をや

又一タスメラミコトハツセリモ、エツキノモトニマシテトヨノ天皇坐長谷之百枝槻下。爲アカリキコレメストキニイセノクニノミヘノウネベオホミ豐樂之時。伊勢國之三重サカヅキラサ、ゲテタテツリキコ、ニソソモ、エツキノハ舉大御盞以獻爾其百枝槻葉オチテオホミサカヅキニウカベリキノソノウネベオチハノミサカヅキニ落。浮於大御盞其妹不知落葉ウカベルラシラステオホオホキタテツリケルニスメラミコトソノミサカヅ浮於盞猶獻大御酒。天皇看行

其浮盞之葉打伏其妹以刀刺キニウカベルハラミソナハシテソノウネベラウチフセミハカシラソノ充其頸將斬之時其妹白天皇クビニサシアテ、キリタハムトスルトキニソノウネベスメラミコトニマシ曰莫殺吾身有應白事即歌曰ケラクアガミヲナコロシタヒソマラスベキコトアリトマシテスナチウタヒケラク麻岐牟久能比志呂乃美夜波マキムクノヒシロノミヤハ阿佐比能比傳流美夜由布比アサヒノヒデルミヤユフヒ

能^ノ比^ヒ賀^ガ氣^ケ流^ル美^ミ夜^ヤ多^タ氣^ケ能^ノ泥^ネ能^ノ。
 泥^ネ陀^ダ流^ル美^ミ夜^ヤ許^コ能^ノ泥^ネ能^ノ泥^ネ婆^バ布^フ。
 美^ミ夜^ヤ夜^ヤ本^ホ爾^ニ余^ヨ志^シ伊^イ岐^キ豆^ヅ岐^キ能^ノ。
 美^ミ夜^ヤ麻^マ紀^キ佐^サ久^ク比^ヒ能^ノ美^ミ加^カ度^ド爾^ニ。
 比^ヒ那^ナ閑^ヘ夜^ヤ爾^ニ淤^オ斐^ヒ陀^ダ豆^テ流^ル毛^モ毛[、]。

陀^ダ流^ル都^ツ紀^キ賀^ガ延^エ波^ハ本^ホ都^ツ延^エ波^ハ阿^ア。
 米^メ袁^ヲ淤^オ幣^ヘ理^リ那^ナ加^カ都^ツ延^エ波^ハ阿^ア豆^ヅ。
 麻^マ袁^ヲ淤^オ幣^ヘ理^リ志^シ豆^ヅ延^エ波^ハ比^ヒ那^ナ袁^ヲ。
 淤^オ幣^ヘ理^リ本^ホ都^ツ延^エ能^ノ延^エ能^ノ宇^ウ良^ラ婆^バ。
 波^ハ那^ナ加^カ都^ツ延^エ爾^ニ淤^オ知^チ布^フ良^ラ婆^バ閑^ヘ。

那加都延能。延能。宇良婆波。斯
毛都延爾。淤知布良婆閑。斯豆
延能。延能。宇良婆波。阿理岐奴
能。美幣能。古賀佐佐賀。世流。美
豆多麻。宇岐爾。宇岐志。阿夫良。

淤知那豆佐比。美那許袁呂。許
袁呂爾。許斯母阿夜爾。加志古
志多加比。加流比能美古。許登
能加多理。碁登母許袁婆。故獻
此歌者。赦其罪也。

ウタヲタテツリシカバソノツミユルサエニキ

出て其処コ云レ里傳北八の此郡小采女郷とありき

妹ハ宇ウ祢ネ辨バ之ノ訓レ傳シ右の郷名ニ和名抄ハ小宇ウ祢ネ倍ベ也

注シせり六帖ハ平假字ハ小モハ倍ハ傳ハて字ハ倍ハ也其

外古き物ハ倍ハ傳ハ多ク書テ辨ハ部ノ意ナリ女ノ意

小ハ非ハ賣ハ常ハ小ハ唱ハ倍ハ部ハ音ハ便ハ然ハ云ハナリ公卿

令ノ采女司ハ小采部ハ六人ハ也別ハ小采部ハ六人ハ也

之ノ采女司ハ小采部ハ六人ハ也別ハ小采部ハ六人ハ也

別ハ注シ小官人ハ二人ハ采部ハ六人ハ采女ハ二十人ハ也

家足ハ云ハ人見ハゆハさて又令ハ集ハ解ハ籙ハ中ハ抄ハ拾ハ芥ハ抄ハ也

采女司ハナリ思ハひハナリガ多ク倍ハ傳ハ也注シて字ハ以テ此記ハ小

みハ采女ハのみハ作リ是ハ古ノ書ハまハ小ハ倍ハ傳ハ也妹ハ字ハ玉ハ篇ハ也

也無ハ爵ハ秩ハ歲ハ時ハ賞ハ賜ハ充ハ給ハ而已漢ハ法ハ常ハ因ハ八ハ月ハ美ハ民ハ遣ハ中ハ大

夫ハ与テ掖ハ庭ハ丞ハ及テ相ハ工ハ於テ洛ハ陽ハ鄉ハ中ハ閔ハ視ハ良ハ家ハ童ハ女ハ年ハ十ハ三

以上ハ二十ハ以下ハ姿ハ色ハ端ハ麗ハ合ハ法ハ相ハ者ハ載ハ還ハ後ハ宮ハ擇ハ視ハ可ハ否

乃ハ用テ登テ御ハ所以ハ明ハ慎ハ聘ハ納ハ詳ハ求ハ淑ハ哲ハ也註シ小采ハ擇ハ也以

因テ采ハ擇ハ而ハ立テ名ハ也云ハ王ハ佛ハ小ハ大ハ智ハ度ハ論ハ小ハ昔ハ有テ須ハ陀ハ須

摩ハ王ハ云ハ晨ハ朝ハ乘ハ車ハ將ハ諸ハ妹ハ女ハ入テ園ハ游ハ戲ハ晋ハ譯ハ華ハ嚴ハ經ハ小

王ハ得テ道ハ時ハ於テ其ハ正ハ殿ハ採ハ女ハ圍ハ繞ハ七ハ宝ハ自ハ至ハ至ハ云ハ云ハ云ハ云

らノ採女ハもハ采女ハのハこハ也聞ハえハ多ク也然ハレバ此ハ方ハのハ古

書ハ小采女ハのハ二ハ字ハをハ一ハ也万ハ葉ハ四ハ小ハ也駿ハ河ハ採ハ女ハ也見ハ之ハ政

合ハせハ多ク也意ハをハ傳ハ傳ハ也万ハ葉ハ四ハ小ハ也駿ハ河ハ採ハ女ハ也見ハ之ハ政

事ハ要ハ畧ハ也昌ハ泰ハ三ハ年ハ注シ進ハ興ハ福ハ寺ハ縁ハ起ハ曰ハ公ハ主ハ命ハ婦ハ妹

女ハ妹ハをハ寫ハ誤ハ也妹ハをハ傳ハ傳ハ也をハ傳ハ傳ハ也をハ傳ハ傳ハ也

女ハ書ハ多ク也後ハ世ハ小ハ也凡ハレハ然ハのハみハ書ハ也

國貢采女ヤウ十一月停諸國貢采女ヤウ但云若叙五位
已上及補雜色者即除采女名ヲ弘仁四年正月制令
伊勢國壹志郡尾張國愛智郡常陸國信太郡但馬國養
夫郡貢郡司子妹年十六已上二十已下容貌端正堪為
采女者各一人ヲ後世も台記久安六年女御
入内別記祿法の起小御膳宿采女世二人云々ヲ
此ころも多々ヲ漸令零落無極ヲ尤可有沙汰事也
云職負令小采女司正一人掌檢校采女等事ヲ佑一人令
史一人采部六人使部十二人直丁一人也ヲ○指サ奉
大御蓋オホミカサ師シは此の蓋を宇伎ウヂ也訓トあり哥カ小コ多タ其
原ハラふフ不フ佐サ加カ豆豆伎伎上卷八千矛神段小也其ト后取ト大御
酒サカ坏ヰ立依指サ奉而云ク傳ト十一のノ中卷倭建命段小也其
美夜受比賣ミヤウケヒメ捧大御酒蓋ヲ以献ヲ見ミえエ續後紀五遣唐使

小餞を賜事処小大使常嗣朝臣避座而進喚采女二声
采女擊御盃采授陪膳采女常嗣朝臣跪唱平天皇為之
奉託行酒人進賜常嗣朝臣云々西宮記小陪膳事節會
陪膳采女奉仕ヲ多延長二正廿五甲自院被奉子日宴
於大裏天皇御南殿中勢卿親王避座立喚采女采女稱
唯進御酒陪膳采女擊盃欲献ヲ愛親王進跪唱平天皇即
執盃御飲畢稱精ヲ○不知落葉浮於盃ニ之面を俯し目
よ至高ク擊ツ了献ヲ故小見えレ依レ傳シ○猶ナは改
むレ傳シきを改メ矣猶其マなりナリ俗言ノ也ナリ古ノ盃
小酒を盛リ了献ヲ至シこノ也ナリ○看行の事ニ中卷倭建命

段小委云云傳北七の ○打伏其姝云くは慎まざる

そかふして息を休むを大く怒り坐臥をり ○應白事白字

本又一本を今に真福寺本に誤り延佳本に ○麻岐牟久能

比志呂乃美夜波は纏向之日代宮者なり此宮の事

卷小云云傳二十六 抑此は景行天皇此大宮の名跡

を今此御世小加く哥守依る事はいふを長

谷の槻の下に宴をれ其本をこそうあは依けは又

大宮は長谷朝倉宮のこをこそ中は依けは古の御

世此大宮を云る心得は故若くは此段の故事は

九て景行天皇の御代の事をりけむがまがいて此御

世の事なりて傳はりしふ若は此哥志をえあひか

やお守る事云ふ傳をかの景行天皇の御代小大宮小

名高き美き槻の大樹に有しを賛ありし哥小て名高

く傳はる依を取て今の長谷の百枝槻を其小准牙

て其次を新小作を継てうあ守依るや何む又は彼

日代宮の槻木名高く美きあましふ語傳牙あ依大木

を依を以て今の百枝槻を即其小云ふして首小新

小作は依るにあ依依契沖西國の熊襲云く准牙奉

膳夫御盃を忘るあ依依ぬ云依はるし又彼御時

あ依事今盃小槻葉の落て浮びしを知らざりしを似

あ依事今盃小槻葉の落て浮びしを知らざりしを似

照宮寺所註卷小此地者朝日之直刺國夕日之日照國

学乃協処考合以修し傳十五の○由布比能は夕日之
なり○比賀氣流美夜は日陰協官なり賀氣流は日影
の刺多協が刺多ありて陰小を協を中昔の哥小加宜
呂布やよみ今世の言ふ加宜流や云是なり然協尔賀
を濁里氣を精協を古の音便ふて此例此彼やあま上
卷豊久士比泥別の処傳五の小云協が如し契冲は日
云至龍田風神祭祝詞小也夕日乃日隱處此はなを隱
小を非此又或人以日影入な○多氣能泥能は竹之根
之なり○泥陀流美夜を根足官なり○許能泥能は木
之根之なり○泥婆布美夜は根蔓延官なり万葉三十五

丁ニ小磯上丹根蔓室木さて此四句は竹木の根ふて地
の堅きよし尔壽さるうはと竹の根孔如くよろが満
足ひ木結根の如く長く久し加協修さよし尔壽多協
加○夜本尔余志は八百土ふて余志多助辞なり冠辞
考小見ゆ契冲余志を吉せりそをく土は数を以て
云修さ物小非協を八百云云必しを数小を非身也
如此さまふ云も常を小協御垣を築くある埴土をよ
ま不協の大さ尔堅多協を次く小許多並修積重絲
了築く故を協修し又御垣のみをく又宮の形修了の
地をも然して堅む協尔も何協修し○伊岐豆岐能美

夜は杵築の宮ふ了伊の發語なり杵築は杵して搗
堅免て築を云出雲風土記出雲郡杵築郷の処小所造
天下大神之宮將奉而諸皇神等參集宮處杵築故云寸
付とあふが如しさて朝日之宮云ふり此は傳を日代
宮を賛ふ依なり○麻紀佐久の真木折ふ檜の枕詞
あり冠辞考小見也○比能美加度は檜之御門なり師
多加比加流比能美夜比登とも万葉一小日之御門と
もあ依る依て此を檜を日小轉して云かけさるる
る日之御門あり云云はれ也若其意を云はるる
る高光此檜を日之御門事万葉一を依日之御門は日
例の借字也了もあ依傳く又五卷小高光日大御朝
庭也も以て其を也後之哥をれ傳檜を日之御門
取加りてよえり也云傳けは傳古を日之御門也云

る中を無かりしや云傳し然も此次は伝大御
哥小高光日之宮也の依るる日之御門也云傳
さるる論をしは傳古より檜之御門也日之御門
也云て其を各異記ありて一言を非りしをれ傳
真木折也云依るる檜之御門○尔比那夜尔を師の
門ふて日の義はふりなり○尔比那夜尔を師の
新嘗屋ふあり云云も依宜し契沖が上の亦を上句
の云依るるひ天皇の新嘗所聞看殿あり上卷小聞看大
の云依るるひ天皇の新嘗所聞看殿あり上卷小聞看大
嘗之殿也あ依る同じ新嘗の事彼処小委云里傳八の
○淤比陀互流を生立有あり○毛と陀流は百足をなり
此を次句の枝くの多々茂里足牙依を云應神天皇の
枝牙係るる枝くの多々茂里足牙依を云應神天皇の
大御哥小毛と知陀流夜尔波也もあ依処考合次傳し
傳廿二の都紀賀延波を槻之枝者なりを先惣て
二十九葉○都紀賀延波を槻之枝者なりを先惣て

其枝者云々と次小上中 ○本都延波は秀枝者ふて上
下の枝を分て云あり ○阿米表淤幣理は天を覆有なり 契沖が淤幣
るの非なり延佳も師も覆りりとせしむる假字がひを但
し延佳が表を覆の淤と心得るるを假字がひを但
表を辞を依をや 淤本幣理云信を本幣を幣
切免て云里さて天を覆多を御殿を天之御蔭日之
御蔭を云如く天の覆ひを依意なり 大虚空小
の袖もが ○那加都延波中枝者なり ○阿豆麻表淤
幣理は吾妻を覆牙をなり東方國を吾妻云事の由
中卷倭建命段不見也 傳世七のさる鄙云小東國
もことし依をかく別小東を云依中枝中枝下枝

三、小分充て云む料のみあり 凡て歌はゆしと事の
理をきはめて云物小を非は事實小違は文理了小背
ける事小ふありさば依来依るに廣く云て詞
を文をを常ありけ依 契沖が本朝小於て東國を
依時も東海道を以て五畿内小次あり云古今集の
東哥の起小をかの豊城命の事を引て殊小東方
國をば別小奉依を由 ささば鄙の外小西國をば云次
して東國を云依云何の意も故を引る多をあり文
○志豆延波を下枝者なり 次波も斯毛都上枝中枝下
枝みふ上小出 ○比那表淤幣理を鄙を覆りあり都
の外を總て何処不ても比那云里書紀神代の哥小

あ乃が加依鄙婦女也何里比那云言の本此意奮き
也も日の下也母云是き何説小日無也云師を田居中
也もよるし也を聞え也さてかく天を云鄙を云東
をさ可云依尔都をい母云さ依こ也を是は槻の枝の
刺覆子依こ也の廣く遠きよりを云依をれ依遠き近
をのみ挙て近を都の内はさるを建雲云依依こ也
を契冲が比那を下界を云か然ら依下界小
らむ也云依を皆ひがこ也なり下界を云を由ある又
東海道を除きて比那小非依せむこ也もいはさる
此を東を別小云依の説をれやも中くふわろ
又阿米也云を畿内小准也云依もろし比那を挙
て京を挙さ依こ也○本都延能を秀枝之なり○延能
を右小云依が如し
宇良婆波也枝之末葉者なり末を宇礼也母宇良也

云常のこ也なり○淤知布良婆問は落觸なり契冲が
了降をふらば了と云るを布礼を布良婆問也云は延
古語ありや云依を非なり良婆問を切む也万葉二三十小
了活かしも依言なりは良婆問を切む也万葉二三十小
上瀬尔生玉藻者下瀬尔流觸經此觸經を今本小は此
の此句小依てフアバへ也訓信也明らけし又此
万葉小觸と書る小て此の意をも知信し經は借字を
○斯毛都延尔は下枝小志豆延也同じ契冲が上
小毛を衍文を依依しや云依の中く小かくさま尔同
わろしはは豆也都也清濁も違可加くさま尔同
言を二もび云也少し易て云こ也古の哥小例多し
上卷八千矛神御哥小阿理登岐加志豆○阿理岐奴能
云く阿理登岐許志豆云くさどの如し
を三重の枕詞小て鮮衣之なり此事玉勝問六の卷小

云、中、関、白、御、時、於、細、殿、有、待、膏、云、く、を、心、云、く、と、と、あ、ま、
や、こ、ま、く、を、此、小、は、由、ま、ま、ま、思、ひ、ま、か、あ、ま、
勿、き、但、し、酒、小、待、油、と、云、く、の、何、る、を、と、此、
の、哥、より、出、く、る、事、小、ま、や、何、ら、む、そ、は、あ、ま、
那、豆、佐、比、比、は、淤、知、は、落、ち、り、那、豆、佐、比、を、浮、ぶ、を、云、九、
此、言、は、或、を、水、小、浮、ぶ、を、云、或、を、底、小、沈、む、を、云、或、
を、渡、海、を、も、云、て、何、も、も、水、小、著、く、や、云、り、
ま、や、玉、勝、間、小、委、く、云、り、此、言、昔、より、物、知、人、み、を、解、誤、
ま、り、さ、て、此、は、御、盃、の、酒、小、浮、ぶ、を、云、て、水、小、を、非、き、
も、酒、も、水、の、類、を、れ、其、中、小、浮、ぶ、を、云、る、例、を、万、葉、三、
は、違、り、依、ら、ず、あ、し、
ハ、小、云、く、黒、髪、者、吉、野、川、奥、名、豆、颯、四、十六、小、鳥、自、物、魚、
丁、小、云、く、津、花、比、去、者、水、鳥、の、水、小、浮、て、十二、十二、小、尔、保、鳥、之、奈、
津、柴、比、来、乎、を、也、股、不、何、り、さ、て、此、正、信、三、句、の、意、は、彼、

神代の初、オホソラ空中、小浮し、アツク脂の、今、此、玉、タマ蓋、小落、浮びて、
加の、ホサ槻、比、落、葉、を、祝、て、如、此、云、を、せ、る、形、り、語、の、初、め、を、
了、知、傳、し、此、處、よ、く、せ、美、那、許、袁、呂、句、許、袁、呂、尔、を、水、
は、冬、紛、ひ、ぬ、依、ま、り、美、那、許、袁、呂、句、許、袁、呂、尔、を、水、
凝、く、小、な、り、上、の、浮、し、アツク脂、と、相、照、し、て、見、傳、し、上、卷、小、於、
是、天、神、モウ、ミコト諸、命、以、詔、伊、那、那、岐、命、伊、那、那、美、命、二、柱、神、ツク、リ修、理、
固、成、是、多、陀、用、幣、流、之、國、カ、タ、タ、下賜、天、沼、矛、而、言、依、賜、也、故、二、柱、
神、立、天、浮、橋、而、指、下、其、沼、矛、以、カ、キ、ナ、レ、テ畫、者、カ、キ、タ、ス、ハ、塩、許、袁、呂、許、袁、呂、迹、
畫、鳴、而、云、く、傳、四、の、此、は、此、國、土、の、成、始、ま、り、事、ふ、て、
い、や、も、く、多、多、や、く、好、き、メ、タ、ク故、事、を、傳、故、小、今、落、葉、の、御、蓋、
小、浮、依、る、を、是、小、よ、を、了、て、ホ、ギ壽、奉、ま、り、形、り、美、那、美、那、を、本、

語^{コト}。塩^{シホ}と^シつる^ルを^ヲ今^{イマ}は^ニ酒^{サケ}を^シ故^ユ。水^{ミヅ}と^シ易^カて^シ云^ハる^{コト}。好^{コト}留^ル
傳^{ツク}。又^{マタ}美^ミ那^ナを^シ御^ミ魚^{イサ}ふ^テ。御^ミ有^ア小^コ奉^{ホウ}る^{コト}。よ^シ一^{ヒト}ふ^ヤり^ナを^セ
を^シろ^クを^シ。槻^キの^ノ葉^ハに^シ落^{ツク}る^{コト}。声^{コエ}なり^トと^シ云^ハる^{コト}。是^レか^ノ本^ホ語^ゴの^ノ鳴^ナ
の^ノ借^カ字^ジを^シる^{コト}を^シ。知^チら^ズなり^トと^シ。鳴^ナ次^ジこ^ノや^ク心^{ココロ}得^{トク}る^{コト}
よ^シ誤^アり^ナひ^ガこ^ノなり^ト。美^ミ那^ナを^シ皆^ミ云^ハる^{コト}を^シ。わ^カる^{コト}
師^シも^シ皆^ミと^シて^シ。酒^{サケ}も^シ葉^ハも^シ共^ニふ^ナり^トと^シ云^ハる^{コト}。水^{ミヅ}と^シ皆^ミと^シ
云^ハる^{コト}。處^{トコロ}ふ^サて^シ。如^カ此^ノ言^{コト}捨^テて^シ。下^{シタ}小^コ凝^{コウ}て^シ。淤^ア能^ニ基^キ呂^ロ嶋^トと^シ
成^ナる^{コト}。是^レ此^ノ國^{クニ}土^{ツチ}の^ノ生^ナ出^デ信^シ之^ヲ始^ハり^ト。云^ハる^{コト}。意^イを^シ含^フめ^ル
詠^{エイ}壽^{ジュ}辞^ジなり^ト。○許^コ斯^シ母^モは^シし^モなり^ト。○阿^ア夜^ヤ尔^ニ加^カ志^シ古^コ
志^シを^シ。此^レは^シ多^タや^ク好^{コト}意^イを^シ加^ヘね^テ。聞^キゆ^上。句^クの^ノ斯^シ母^モ
や^シ云^ハる^{コト}。辞^ジを^シ輕^カく^シ却^カて^シ。云^ハる^{コト}。意^イを^シ帶^オふ^レば^シ。今^{イマ}御^ミ蓋^{カシ}ふ^レ。落^{ツク}葉^ハ
の^ノ浮^ウる^{コト}を^シ。知^チら^ズ傳^{ツク}其^ノ隨^{ツキ}。獻^{ケン}進^{シン}る^{コト}。過^ア失^シ却^カて^シ。多^タや^ク免^メ
る^{コト}。

了^マる^{コト}。御^ミ事^ジなり^ト。申^マる^{コト}。○多^タ加^カ比^ヒ加^カ流^ル比^ヒ能^ニ美^ミ古^コ
上^ウ小^コ出^デこ^ノ。以^テ天^{テン}皇^ス小^コ對^{タイ}奉^{ホウ}て^シ。直^チ小^コ指^シて^シ。申^マる^{コト}。○許^コ
登^ト能^ニ句^ク加^カ多^タ理^リ基^キ登^ト母^モ句^ク許^コ表^ハ婆^ハ上^ウ卷^{マキ}子^シ出^デ傳^{ツク}十一^ノの^ノ○
獻^{ケン}此^ノ歌^カを^シ。物^{モノ}小^コ書^カて^シ。獻^{ケン}進^{シン}る^{コト}。傳^{ツク}十^ノ六^ノ葉^ハの^ノ○
事^{コト}を^シ思^シふ^レ。然^シも^シ非^ヒは^シ。多^タ歌^カひ^テ。奉^{ホウ}る^{コト}。聞^キ看^ミさ^レ。傳^{ツク}十^ノ六^ノ葉^ハの^ノ○
云^ハる^{コト}。○赦^{シヤク}其^ノ罪^{ツミ}。哥^カの^ノさ^レる^{コト}。よ^シ米^メ俵^{ヒョウ}趣^ソも^シ。次^{ツギ}に^シて^シ
美^ミけ^レ。傳^{ツク}十^ノ六^ノ葉^ハの^ノ○
こ^ノ傳^{ツク}十^ノ六^ノ葉^ハの^ノ○

爾^ニ大^{ダイ}后^{コウ}歌^カ其^ノ歌^カ曰^ク。夜^ヤ麻^マ登^ト能^ニ許^コ

能多氣知爾古陀加流伊知能
都加佐爾比那閑夜爾淤斐陀
互流波毘呂由都麻都婆岐曾
賀波能比呂理伊麻志曾能波
那能互理伊麻須多加比加流

比能美古爾登余美岐多互麻
都良勢許登能加多理碁登母
許袁婆即天皇歌曰毛毛志紀
能淤富美夜比登波宇豆良登
理比禮登理加氣互麻那婆志

新嘗所聞食以殿を依を上を依哥也上の詞を變てか

くはよみ賜了依形る依し高市の中よて小高く最高

も大宮を必如此最高き地非必大宮を依依けま

賀波能は其之葉之なり此より四句と彼高津宮段の

御哥小出但彼は新賀波那能互理伊麻斯芝賀波能比

呂理伊麻須波也あり傳卅六の多加比加流比能美

古尔上小出○登余美岐傳十一の多豆麻都良勢上卷須勢理

毘賣命の御哥小見ゆ傳十一のさて此は上小比能美

古尔也あれど献き人小仰せ賜多形り○毛志紀

能き大宮の枕詞よて冠辞考小見ゆ○淤富美夜比登

波は天宮人者よて大宮小仕奉依人あちを宮人

比を清音をり後世字豆良登理を延佳本小字字

濁依を古よ加り字豆良登理を延佳本小字字

例のなりさ加ら改免依ひがらやをり記中字豆良登理を延佳本小字字

鶉鳥ウツトリ常み字豆良やのみ云て鳥やを云ざれど

万葉添て鴨鳥を記中和名抄小鶉和名字都

良或説小字豆良を韓語なり今朝鮮よても依ら

延佳本小此を可豆良やを云て師も蔓

了假字の事を重き物小云て似此記の假

字初加ひ例をも思は建ざり比礼登理加氣互を

領中取掛而あり。領中云物の本此由多上卷蛇比礼
之河依延小云依が如し。傳十のさて是を振る。書
紀欽明卷比哥に柯羅俱尔能基能陪你陀致底於譜磨
故幡比例甫羅須母云。万葉五丁小麻都良我多佐
欲比賣能故何比例布利斯云。多々見え古を凡て女
を此を掛あり。比礼。書紀崇神卷小埴安彦之
妻吾田媛取倭香山土褰領中頭而云。万葉十三丁小
濱菜摘海部處女等。纓有領中文光蟹云。多々見え多
里大神宮儀式帳小生絹御比礼八端。須蘇長各五
儀式帳小毛生純比礼四具。長各二尺五寸。廣隨幅。さて色を凡て

白きか万葉哥小。袴領中乃白きも。細比礼乃驚き。如
初けよ。弟り。和名抄小。領中婦人項上。饒也。日本紀私記。
云比礼。以て書紀天武卷小。十一年三月詔曰。云。亦膳
夫采女等之手。緜肩中。並莫服續紀三小。慶雲二年四月
先是諸國采女。肩中田依。令停之。至是復舊焉。縫殿式年
中御服中宮料小。領中四條料。紗三丈六尺。別九比山抄
内宴條小。陪膳女藏人比礼料。羅事。舊年仰織部司人別
一丈三尺。を此見えあり。又式の中小。帔也。あ物も。比
らむよ。尋ね侍。漢籍が。毎云。依。枕冊子。采女
帔。比礼。非次。思。紛。多。侍。か。交。大。殿。祭。祝。詞。小。
の。裝。束。小。比。礼。を。掛。多。依。ら。見。え。あり。大。殿。祭。祝。詞。小。

此礼懸伴緒云々大被詞小毛如此所りさて此上小鷄
鳥等詔多意を契冲が鷄のふれ肩より胸を傳河依を
領中掛ゆれさま小喻言を詔言り云依が如し
此鳥項より胸かけて白を斑に領
中掛ゆれさま其ふぞ似ありけむ
○麻那婆志良を
鶴鷄の一名云里和名抄小毛此名は見え候
和名ホ
布理日本私記曰止豆木
字鏡小鷄弥左古又万奈柱
手之閉止里也のみあり
了多鷄加利又万奈柱す由鷄豆く万奈柱を
皆詳あり(○)表由岐阿閉を尾行令合なり阿閉は阿
波世の切里多依ふて阿比云云を異河里
活用此言
を閉云ふは令の意を依多し集を初言云は令
集なり添をそ牙云は令添あり海を言加倍云を

令浮なりかて此行合を彼方此方より對ひて行合
此類多し
あを非次相並び連を依と云て鷄の行合の間を云
行合も同じ彼をばあ云鳥此群居依尾やもの
多く並傳依を以て譬言ゆ依ふて領中掛多依宮女等
の何る多並座多依裳やもの後方小長く引きさるが
相並び連なり多依状を詔言依形り又上を女此は男
依状かやも思可然あを非じ其故を上の比礼登理
加氣の処小豆やりて此由岐阿閉の下小豆豆云
辞なき上より一連して女や男やを並傳云依さま
小非次且男女相混りて宴依傳くも何れ交されば
此を多し女官多ちの状を詔言依ふて男官人の状ふ
て行は宮女の裳れ次を長く引ても初るが敢
くふ依ふ小喻言多し加や云依をいみどふか

あや形り是を次の御向小居てや何れふよく行くと
言を由をしその言を尾を引てよく行くとを尾行敢
やをい加傳り云む何れ拙き ○尔波須受米を庭雀を
語は何る傳りもたが言交 ○雀をよく庭雀を降て群を居る物
なる故小庭雀を詔する物此も次の御向此序
なるうや上二の例此如し ○宇受須麻理韋互を群統
居而なり宇受は群居もて上卷小宇士多加礼何る
宇士や通ひて親しく通音なり同じ宇士の事彼処小
云伝を考牙て知傳し傳六の彼蛆も多々群が伝意の
名を伝傳し微小虫を俗小宇受虫と云小同じ須麻理は書紀小
八坂瓊之五百箇御統御統此云美須磨屢く貫連ぬ集
白玉之五百箇集やよ免るも是なりや何れや同言小

多々會集不伝を云何れ此御向を庭雀の如く多
く群集居てや詔言伝なり契沖須也久や同韻をれ傳
豆の誤小てう然とも至ありやて祝詞の集傳を引て
同言なりや云や多き皆ひかこやをり了然蹲居の
譬小を庭雀を似如かほしから交又婦人れ然とま
里居むらやの意 ○祁布母加母を契沖今日歌なりや云
小をあら交 ○此詞古哥小何れ例皆然小て二の母を共小助辞を
星 ○佐加美豆久良斯多万葉十八十一小多知婆奈能
之多泥流尔波尔等能多豆天佐可弥豆伎伊麻須和我
於保伎美可母又北左加美都伎安蘇比奈具礼止云
十九世九小酒見附榮流今日之安夜尔貴左なりや何

宴樂のりなり然云言の意を師云万葉廿ふ美
豆久白玉や以依美豆久や同く沈醉淵醉を云が
如し少云きも今思ふ又万葉十八丁ふ海行者美都
久屍續紀天平廿一年の詔ふも此語ありやろるをやも水ふ所漬くや
を身ば酒ふ所漬くしふ云ふや俗言ふも酒を甚く
好みてをばく飲者
を酒ふ漬く又思ふふを神名帳ふ造酒司坐酒殿神二
居依や云里又思ふふを神名帳ふ造酒司坐酒殿神二
座酒弥豆男神酒弥豆女神姓氏録酒部公條ふ大鷓鴣
天皇御代從韓國參來人兄曾く保利弟曾く保利二人
天皇勅有何才白有造酒之才令造御酒於是賜麻呂号
酒看都子賜山鹿比咩号酒看都女因以酒看都为氏此文

印本を誤字あり今を以て依酒美豆を即酒のりなり
を古本に依り今を以て依酒美豆を即酒のりなり
了然云意を榮水を依傳し其を佐氣ののみ云を
水を省ふ依名形依傳し師云酒中云名を榮云云
をり是を飲えは心の榮ゆれ
多り加て酒宴依を佐加美豆久云を榮水飽ふ
酒を飽ふ飲樂布ふ此もやのむ良斯を推度
海辞あり○此能美夜比登は日之宮人ふ即上の大
宮人ふ日天皇是日御子ふ坐て萬を日神ふふ
牙て申次例ふ大宮を以日宮申次なり万葉一ふ
日之御門五小高光日御朝廷を以もあまさて此宮人
を宮女等を指て詔牙依なり○此大御哥此処ふ入る

詔ハ良斯レハ辞アリハカミハ詔ヲ依御目ノハアリハ看行シ
多依状ヲハミ賜テ依御詞ハ非レハ此ハ槻下ハ豊樂ハ
坐テ同クヨミ賜テ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
して彼方ヲハミ賜テ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
らして彼方ヲハミ賜テ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
日ハ加ヘ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
御言通ス加ヘ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
樂リ別殿ハ知レヤハヨミ賜テ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
了上ヲ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
是出ル依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
傳ハ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮

云ハ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
振ル依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
彼ノ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
を天ノ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
以テ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
餘語ハ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
衰婆ハ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
それ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
了傳ハ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
録ハ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
加ヘ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
語ハ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
而ハ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮
延佳ハ依御詞ハ聞ク女等ノ物隔テ宮

みて、ホギ壽奉^{ホギ}と、ホギ譽賜^{ホギ}を^{ホギ}給^{ホギ}ふ^{ホギ}なり。○給^{ホギ}多^{ホギ}祿^{ホギ}也。若^{ホギ}櫻^{ホギ}宮^{ホギ}段^{ホギ}
モノサハニクニヒキ
 多^{ホギ}祿^{ホギ}給^{ホギ}ふ^{ホギ}なり。祿^{ホギ}の事^{ホギ}彼^{ホギ}処^{ホギ}小^{ホギ}云^{ホギ}なり。傳^{ホギ}世^{ホギ}八^{ホギ}の^{ホギ}事^{ホギ}也。
 後^{ホギ}世^{ホギ}小^{ホギ}至^{ホギ}係^{ホギ}る^{ホギ}傳^{ホギ}彼^{ホギ}伊^{ホギ}勢^{ホギ}國^{ホギ}三^{ホギ}重^{ホギ}郡^{ホギ}小^{ホギ}米^{ホギ}女^{ホギ}郷^{ホギ}也^{ホギ}云^{ホギ}なり。
 係^{ホギ}ら^{ホギ}ゆ^{ホギ}る^{ホギ}全^{ホギ}此^{ホギ}妹^{ホギ}が^{ホギ}此^{ホギ}哥^{ホギ}と^{ホギ}よ^{ホギ}み^{ホギ}て^{ホギ}い^{ホギ}み^{ホギ}じ^{ホギ}く^{ホギ}賞^{ホギ}美^{ホギ}ら^{ホギ}る^{ホギ}也。
 奉^{ホギ}り^{ホギ}て^{ホギ}い^{ホギ}せ^{ホギ}く^{ホギ}名^{ホギ}高^{ホギ}か^{ホギ}り^{ホギ}し^{ホギ}故^{ホギ}を^{ホギ}係^{ホギ}ら^{ホギ}る^{ホギ}也。
 傳^{ホギ}し^{ホギ}所^{ホギ}か^{ホギ}ら^{ホギ}る^{ホギ}也。今^{ホギ}世^{ホギ}も^{ホギ}米^{ホギ}女^{ホギ}村^{ホギ}也^{ホギ}云^{ホギ}なり。

コノトヨノアカリノヒニタカスガノヲドヒ
 是豐樂之日。亦春日之袁杼比
メガオホニキタテニツルトキニスメラミコトノウタヒタニヘルミ
 賣獻大御酒之時。天皇歌曰。美

ナソ、ク、オ、ミ、ノ、オ、ト、メ、ホ、ダ
 那曾曾久。淤美能袁登賣本陀
リ、ト、ラ、ス、モ、ホ、ダ、リ、ト、リ、カ、タ
 理登良須母本陀理斗理加多
ク、ト、ラ、セ、シ、タ、ガ、タ、ク、ヤ、ガ、タ
 久斗良勢。斯多賀多久。夜賀多
ク、ト、ラ、セ、ホ、ダ、リ、ト、ラ、ス、コ、コ
 久斗良勢。本陀理斗良須古。此
ハ、ウ、キ、ウ、タ、ナ、リ、コ、ニ、ヲ、ド、ヒ、メ、ウ、タ、ラ、タ、テ、ニ、ツ、ル
 者宇岐歌也。爾袁杼比賣獻歌。

其歌曰。夜須美斯志。和賀淤富
 岐美能阿佐斗爾波伊余理陀
 多志由布斗爾波伊余理陀多
 須和岐豆紀賀斯多能伊多爾
 母賀阿世袁此者志都歌也。

是豊樂は上の長谷の百枝槻、下の多り。○袁行比賣上
 小出傳此卷これと、妹小やあまけむ。其由を上。○美那
 曾久々。又清音水灌小て次御句の淤小係は依枕詞
 たり。冠辞考小見ゆ。又其みお珍こ多れ條とも考合次
 久々云を少しい加ふ。依して水中小ゆあやと。曾
 依るやを。曾久々云をり。さきば此を常小水小浸
 してゆ。淤やたぐとを魚の意をり。持もく魚を宇袁
 を依を。淤や云を上の曾久の久此韻字ふて長く引
 て詠言ば久宇淤やを依。其宇淤は袁切る。是はたの
 於か魚也。聞ゆれあり。魚を宇を省きて袁云は常
 於け。於らあり。さて此。淤やたぐけ。依る。山を種く
 の説。ゆき。やもみか。とろし。了。於契。冲を仁徳紀の御哥

なり。此方にて多^タ理^リ云物も古は酒を注ぐ器なりし
故に此字を當^タる形りされば古の樽は後世の瓶^{ビン}子^コ
銚^{チウ}子^コを也を用^ユ依^イ如^ニく用^ユひし器なり然^シる^ル後世^ノ
小の樽を酒を入^ル置^ク器^ヲを^シて注^グ器^ニハ非^ズ又^モ瓶^{ビン}
子^コは和名抄^ニ加^ヘ米^メ等^ト何^レ古^ノは酒を注^グ器^ニハ非^ズ然^シる^ル
ら^ニ銚^{チウ}子^コハ佐^サ之^ノ奈^ナ閑^{カン}等^トあり酒器^ハ非^ズ然^シる^ル
此^レ後世^ノ酒を注^グ器^ヲを^シて注^グ器^ニハ非^ズ皆^シ古^ノ後^ノ多^タ理^リ
世^ニ其^ノ形^ヲも用^ユひざる^ルも^ハありか^ハは^シ依^イなり^シ多^タ理^リ
云^フ名^ノ義^ハ垂^チ下^カ其^ノ口^ヲより酒^ノ垂^チ出^ス依^イなり^シ
後世^ノ多^タ流^リ云^フは轉^マる^ルも^ハて鳴^ネ鏞^{ヨウ}を^シ古^ノ形^ヲ
も加^ヘぶ^ラ云^フし^ト後^ノハ依^イか^ハず^ラ云^フ椽^{ケン}を^シ
古^ノ形^ヲり^キ云^フし^ト後^ノ和^ノ名^抄ハ漆^シ器^類ハ辨^ハ色^立
多^クは依^イなり^シ類^ヲなり^シ和^ノ名^抄ハ漆^シ器^類ハ辨^ハ色^立
成^ニ樽^ノ字^亦作^樽見^説文^今按^無和^名抄^ハ延^喜式^ハ
も酒樽^ハハ依^イ稀^ニ見^える^ノみ形^ヲなり^シ是^ト見^える^ル古^ノ
名^中ご^ろ京^畿ハ失^テ邊^鄙ハ殘^ミ也^ハ秀^ク其^ノ形^ノ長^ク
添^ガ後^ハ又^廣く普^クく^ナれ^ル不^レ也^ハ

高きと云^フ依^イ傳^ヘし登^ト良^ラ須^スハ登^ト流^リと延^ト依^イ言^ハ母^ハは^石
ふうぐひも鳴^ムも^ハ此^レ嬢^ヲ子^ノ樽^ヲ執^リ持^テる^ルさまと見^え
ぞ云^フ類^ノ母^ヲなり^シ此^レ嬢^ヲ子^ノ樽^ヲ執^リ持^テる^ルさまと見^え
そ^ノな^はは^して^テ詔^ヲ依^イ御^ノ辞^ヲなり^シ契^ハ沖^ハ此^レ御^ノ句^ヲ心^得加^ハ
の名^ヲや^ハ云^フて^テ次^ノの御^ノ句^ヲも^ハ皆^シ相^撲の事^ハ解^ス
と依^イハ云^フぬ^ハハ^ハが^ハ依^イなり^シ又^モ師^ヲ延^ト佳^ハ本^ハ解^ス
と太^ニ改^メる^ル絡^ヲ珠^ヲハ^ハ依^イなり^シ又^モ師^ヲ延^ト佳^ハ本^ハ解^ス
是^レ決^メて^テ絡^ヲ珠^ヲハ^ハ依^イなり^シ又^モ師^ヲ延^ト佳^ハ本^ハ解^ス
中^ハ大^ニ加^ヘ假^ノ字^ハ非^ズ故^ト云^フハ^ハ依^イなり^シ又^モ師^ヲ延^ト佳^ハ本^ハ解^ス
所^ハ大^ニ加^ヘ假^ノ字^ハ非^ズ故^ト云^フハ^ハ依^イなり^シ又^モ師^ヲ延^ト佳^ハ本^ハ解^ス
濁^音ハ^ハ用^ユひ^シ清^音ハ^ハ用^ユひ^シ書^紀ハ^ハ葉^ヲ中^ノ卷^ハ一^ノ只^ハ一^ノ
此^レ豊^樂と^テ大^ノ御^酒を^シ清^音ハ^ハ用^ユひ^シ書^紀ハ^ハ葉^ヲ中^ノ卷^ハ一^ノ只^ハ一^ノ
珠^ヲ取^リて^テ大^ノ御^酒を^シ清^音ハ^ハ用^ユひ^シ書^紀ハ^ハ葉^ヲ中^ノ卷^ハ一^ノ只^ハ一^ノ
を^シ置^クて^テ糸^ヲ加^ヘく^ル器^ハハ^ハ依^イなり^シ又^モ師^ヲ延^ト佳^ハ本^ハ解^ス
物^ハ非^ズ取^リて^テ糸^ヲ加^ヘく^ル器^ハハ^ハ依^イなり^シ又^モ師^ヲ延^ト佳^ハ本^ハ解^ス
似^テ加^ヘけ^ルか^ハ取^リて^テ糸^ヲ加^ヘく^ル器^ハハ^ハ依^イなり^シ又^モ師^ヲ延^ト佳^ハ本^ハ解^ス
誤^リ又^モ一^ノ本^ハ又^モ一^ノ本^ハ子^ハ大^ニ誤^リ今^ハ真^福寺^本一^ノ
依^イなり^シ又^モ一^ノ本^ハ又^モ一^ノ本^ハ子^ハ大^ニ誤^リ今^ハ真^福寺^本一^ノ

きを見そぬけ感て。質称賜子ふれて。罇の下上を堅
く取す。詔名をいふく浄き心を以て。勤免をよく仕
奉す。勿懈^ナヲそ中罇を取^ル不託^ツて。凡て仕奉^ルゆ^ルを誠
免賜^ル子^ニふり。さて然誠賜^ル名^ヲ。即^チ質^ホ賜^ル名^ヲ。萬^ノの事
を賞^ホむ^ルて。いふく善くせよ。此^レ警^イ。
免^ル勵^ル万^ノ次^ヲ常^ニあ^ルる^ルを^ル。○宇岐歌をいかな
体由の名ふか未思^ヒ得^ル次師^ハ。酒盞^キ哥^ヲなり。云^ハき^ル終^ルれ
也。そを上^ニを^ル体^ニ三重^ノ妹^ノの哥^ニを^ル也。ゆ^ハも云^ハ免^ル。此^レ御^ノ哥^ハも
由^ハな^リ。若^シくは詠^ル名^ノ声^ノの浮沈^ヲを以て号^ヲふ^ルて。浮^ル哥^ハ
ふ^ル也。其^レ不^レ就^ルて思^フ事^ハ不^レを^ル。次^ニを^ル体^ニ志^ヲ都^ノ哥^ハも。沈^ル哥^ハか^レ也。○
阿^ハ佐^ハ斗^ハ尔^ハ波^ハ斗^ハ字^ハ諸^ハ本^ハ不^レ計^ス不^レ真^ニ福^ノ寺^ハ本^ハ誤^リまり。今^ハ次

なる由布斗不^レ准^ル了^ル效^ハひ^テ改^メ末^ニ終^ル斗^ハある^ルを^ル也。決^メけ^ル也
は^レ形^ヲ。記^ハ中^ニ。計^ハ字^ハは假^ニ字^ニ用^ヒひ^テ体^ノ例^ヲを^ル。計^ハ也^ハあ
就^テ云^ハ体^ハ説^ハは^レ朝^ハ戸^ハ不^レ者^ナあり。○伊^ハ余^ハ理^ハ陀^ハ多^ハ志^ハを^ル伊^ハは
皆^ハ乃^ハ云^ハ也。發^ス語^ハ不^レ倚^リ立^ルなり。万^ノ葉^ハ十七^ニ。三^ニ十^ニ。不^レ安^ニ之^ハ可^ク伎^ハ能^ハ保^ル加^カ
尔^ハ母^ハ伎^ハ美^ハ我^ハ余^ハ里^ハ多^ハ志^ハ。○由^ハ布^ハ斗^ハ尔^ハ波^ハハ。斗^ハ字^ハ真^ニ福^ノ寺^ハ
ハ計^ス誤^リまり。今^ハは舊^ニ印^本。又^ハ夕^ハ戸^ハ不^レ者^ナあり。さて朝^ハ戸^ハ
多^ハ志^ハ云^ハ。夕^ハ戸^ハ不^レは云^ハ。朝^ハの^ハ夕^ハ此^レ夕^ハ也。二^ツ所^ハも
あ^ハは^レ非^ニ。万^ノ葉^ハ二^ニ。三^ニ十^ニ。不^レ朝^ハ官^ハ乎^ハ。忘^ル賜^ル哉^ハ。夕^ハ官^ハ乎^ハ。背^ル賜^ル哉^ハ。
官^ハ也^ハ云^ハ。朝^ハ夕^ハ常^ニ不^レ坐^ス。云^ハ。云^ハ。同^ニじ^ニ云^ハ。さ^レる^ル也。朝^ハ不^レ戸^ハを
閉^ルく^ル時^ハ也^ハ。云^ハ。夕^ハ不^レ戸^ハを^ル閉^ルく^ル時^ハ也^ハ。云^ハ。云^ハ。

如くなれやも其形小なりて座を立せし云傳
し凡て物の形の高きを傳み立せし云傳例なれ傳人
の座を形も高きものなれば然云むや妨ふか傳
傳し又古は立なから傳傳機を有て其ふや思
ふや然し○斯多能き下之なり○伊多尔母賀を板
ふ毛が事ありて其板小なるなりし願多詞あり契
冲云万葉第十一云如是許恋乍不有者朝尔日尔妹之
将履地尔有申尾此意小似あり云是同八小玉切命
向恋従者公之三船乃梶柄母我なり云伝類を多し
さて師云下の板云伝即脇机の板なり云是も伝
か如し脇机を押す腕の下小在物於伝が故小下也
云云伝なり又思ふも古比脇机小き脚の下小も又
板の事其を云伝もや若然ら傳上の板

をねきて下を伝を云伝を身と卑下す云伝意
伝もや然しやもを傳師の説を傳の意も加ふや傳
き○阿世表は吾兄より師云即脇机を云云云も
伝が如し倭建命の御哥小一松吾兄を云伝伝が如し
此言の事彼処小云傳北八のさす此小如是云伝を
天皇の大御身小親きと羨み多伝意なり○一首の意
冬天皇比朝夕小常々倚座て大御脇の下を伝脇机に
板を花為て大御身小親く近く仕奉らるなり
云なり○志都歌を高津宮段小出傳世六の
五十七兼

コノスメラミコト
天皇御年壹佰貳拾肆歲御陵

カフチノタチヒノタカワシニアリ
在河内之多治比高鷗也。

壹佰貳拾肆歳書紀より二十三年秋七月辛丑朔天皇

寢疾不預云々八月庚午朔丙子天皇疾弥甚與百寮辞

訣敵敵崩于大殿云々御年を見え云々允恭卷小七

ふー見え多依り依ら崩年六十二歳云々此記云甚

く異なり帝王編年記云雄略天皇崩年百四此天皇百

四有疑其故者天皇安康天皇同母弟也又今年以往百

四年者當仁德天皇六十四年丙子父允恭天皇者彼仁

德六十二年生然則三歳不可生子云々是凡百四云何

云然者弥可云生父之前云云或書小九十三云何

の記不見え多依るか若也或書小九十三云何

書紀此古本不然有一本云云此間小己巳年八月九日

印本真福寺本又一本云云此間小己巳年八月九日

崩也云例此細注乃至己巳年以書紀小仁賢天

皇の二年なり此天皇紀年ハ不審ハ下王仁

徳天皇此皇女小坐と安康天皇の元年小大長谷命の

多々小賜賜事云々其年大長谷命以卅七歳小

父天皇崩坐年小生坐賜事云々又此天皇允恭天皇の七年小

賜多信さ御齡小仍ら交又此天皇允恭天皇の七年小

生坐て位小坐賜事云々又此天皇允恭天皇の七年小

猪子加事賜事云々又此天皇允恭天皇の七年小

を離多賜事云々又此天皇允恭天皇の七年小

仁徳天皇丁卯年崩云々賜事云々又此天皇允恭天皇の七年小

○古事記傳四十二

○五十五

